『炭俵』序論 ――芭蕉の「山路」――

竹内 千代子（英知大学文学部助教授
立命館大学ＣＯＥ推進機構）

はじめに

梅が香にのつと日の出る山路哉　芭蕉

右は、元禄七年春、芭蕉と野坡との両吟歌仙興行の発句である。[注1] そして、元禄七年六月刊行の『炭俵』の巻頭に収められた。『炭俵』の編纂についての芭蕉の関与は、これに先行した『猿蓑』に比して、あまり強いものではなかったとされる。しかし後に詳述するが、芭蕉が晩年に唱えた「かるみ」の理念が具現されているとされる「梅が香に」の句が巻頭に据えられているという事からは、『炭俵』全集にもそれが具現されていることを読み取らなければならないであろう。「かるみ」の理念は、「梅が香に」歌仙一巻に留まるものではなく、『炭俵』全集に俳諧の新しい境地が具現されているという事である。「かるみ」は、芭蕉にあって究極の俳諧理念であり、刻々と深化の過程をたどるが、『炭俵』の頃はその完成期に最も近く、その考察の意義は大きい。本稿では、「梅が香に」の句を通して芭蕉が示した「かるみ」の具体的な様相を考察する。先行する詩歌の本意・本情からどのようにして新しい俳諧の詩境を見出だし、それらをどのように融合させたか。それが『炭俵』の提示した俳諧の新しい境地につながるであろう。また、その独自な新境地は、近現代に繋がる創作理念であり、『炭俵』の文学史的位置付けも提示しておきたい。

一　のつと

さて、現在「梅が香に」の句は、「かるみ」（以下、軽みと表記する）を具現した代表作と評されている。左に軽みの語句を用いた注釈をあげる。

○のつと　突如、悠然と出現するさま。擬態語・擬声語による句作りは軽みの一特色。
（岩波・新日本古典文学大系『芭蕉七部集』白石悌三稿）

○清爽感あふれる早春の山路の風景を平明な句調で捉えた。軽みの代表作。俗語「のつと」（ぬっと）の語感を巧みに生かしている。（新潮日本古典集成『芭蕉句集』今栄蔵稿）

○「のつと」によって、芭蕉はこのころの持論である「軽み」を実践したことになるであろう。
（小学館・日本古典文学全集『松尾芭蕉集』井本農一稿）

○句の平明な趣き、「のつと」の口語的なひびきから軽みの句の

代表的なものとされる。

（岩波・日本古典文学大系『芭蕉句集』大谷篤蔵稿）

○朝日の出るさまを「のつと」といふ俗語で描き出したのは、芭蕉が最初の人であった。さうしてここにすべての旧染を脱した俳諧の軽み、俳諧の新しみが存するのである。

（頴原退蔵著作集「名句評釈」）

このように、近代以降の注釈は、句の平明さと「のつと」とに注目し、軽みの具体的な様相として捉えた。この「のつと」については、句が発表された当時から話題となり、安易な追随・模倣があったことが知られる。その一例は、

其角一日語て曰、「今同門の輩、先師の変風をしたふものを見れば、

梅が香にのつと日の出る山路哉　先師

と吟じ給へば、或は、「すつと」、「きつと」となどいへり。師の「のつと」は、誠の「のつと」にして、一句の主也。門人の「きつと」、「すつと」は、きつとも、すつ共せず、尤見ぐるしし

と、去来の『旅寝論』（元禄十二年三月序）に其角が言うごとくである。其角は、擬音・擬態語の使用において、門人の創意工夫が認められない安易さを批判したのである。

古注でも「のつと」は注目されている。『俳諧七部集弁解』（著者不詳、年次不詳）に、

のつとの語、俳諧体の骨髄成べし

また、『俳諧七部通旨』（蓮池主人著、嘉永五年跋）に、

風雅弁に、梅に日の出るというた連歌にあらず。俳諧なりと見へたり。此吟のつと日の出るといふ詞の神妙なるより、山中言がたき風姿あるよし。

と言い、「のつと」は、一句の重要な要素として認識されていた。以上に見てきたように、「のつと」は、一句の重要な要素であることが諸説の一致しているところであるが、さらに具体的な考察を加えたい。

擬音・擬態語は、時に撥音、促音、拗音も含み、俗語であるので、俳諧に取り込むべき条件を満たしている。貞門俳諧、談林俳諧においても既に用いられているが、工夫を凝らした積極的な用例は少ない。一方、芭蕉の「のつと」は、「すつと」や「きつと」と異り、擬音・擬態語として新たな創意工夫がなされている。それは、あるものが「出る」形容としての「ぬっと」[注2]を刷新し、発明したところである。すなわち、類型化した語の刷新であり、これが軽みに通じるのである。なお、幸田露伴の『評釈炭俵』[注3]に、「のつとはぬつとに同じかれど、のつとの方、卑しからず聞えて、おほらかに響けば、かくは句づくれるなるべし」の指摘がある。「のつと」と「ぬつと」との相違を指摘したところが注目に値するが、単に「卑しからず」という品性だけの問題ではない。すなわち、これらの語は類型からの刷新という積極的な意図があり、「のつと」と「ぬつと」とは峻別する必要があるのである。

また、詩歌の伝統においては、日の出の表現には、擬音・擬態語を用いない。例えば、次の歌のように日はただ「出づる」のである。

春宮のむまれ給へりける時にまゐりてよめる

峰たかき春日の山にいづる日はくもる時なくてらすべらなり

典侍藤原因香朝臣　（古今和歌集・三六四）

ここで、芭蕉の擬音・擬態語の用例を見ておきたい。

びいと啼く尻声悲し夜の鹿　（元禄七年、杉風宛書簡・笈日記）

この句の「びい」は、先行する鹿の鳴き声の類型からは見出だせない。ただし、北村季吟の『山の井』（正保四年成立）の、鹿の項に、「笛による鹿」の記載があり、笛のピーという音を連想したかもしれない。しかし、鹿の鳴き声の先行例としては、『古今和歌集』（秋・

二一五）のよみ人しらずの歌の

おく山に紅葉ふみわけなく鹿の声きく時ぞ秋は悲しき

などのように、鹿が鳴くというだけで、擬音語での表現は稀である。その中で次の『古今和歌集』の歌は、数少ない用例である。

秋の野に妻なき鹿の年を経てなぞわが恋のかひよとぞ鳴く

紀淑人　（俳諧歌・一〇三四）

鹿は甲斐が無いと嘆くに言い掛けて「かひよ」と鳴いたが、芭蕉は和歌の前例によらず、己の感性に従って独自の俳諧感覚で「びい」と捉えた。これが「新しみ」であり、「流行」である。芭蕉には、擬音語の用い方についても、和歌などの先行する詩境から俳諧の新しい詩境を開拓したいという姿勢が見受けられるのである。それと同時に、「びいと啼く」の句は、『古今和歌集』の「おく山に」の歌などに代表される鹿の声の悲しさという伝統的世界観を内包している。これが「不易」である。「びい」と捉えた「流行」と、鹿の声の悲しさという伝統的世界観の「不易」とを対峙させたところに、芭蕉が最晩年に唱えた俳諧理念である「不易流行」の実現がある。

二　梅が香

前章で見たように、「のつと」が軽みの一つの特徴と成り得たのは、語感の良さということに加えて、類型化した表現からの刷新であった。次に述べる「梅が香」についても同様に、類型からの刷新が指摘される。新日本古典文学大系『芭蕉七部集』の白石氏の注釈に、

梅が香を闇夜ならぬ夜明けにとらえ、梅に月ならぬ朝日をあしらった。

とする。これは、先行する類型的な詩境のなかから新しい詩境を拓くとする芭蕉俳諧の概念を具体的に提示した解釈であろう。この注釈に先行するものとしては、古注の『俳諧七部通旨』があり、「風雅弁に、梅に日の出るというた連歌にあらず。俳諧なりと見へたり。」と指摘する。本論では、先行の注釈が注目している梅の香る時間に加えて、梅の咲く場所にも注目したい。以下に考察する。

まず、和歌における梅の本意・本情を見る。近世に広く流布した有賀長伯の歌学書『初学和歌式』（安永二年刊）に

梅　にほひを専によめり（略）夜梅は、やみはあやなしとも、月夜にはそれともみえぬなど相応也（略）ぬししらぬ垣ねの梅にあるじゆかしき心をもいふ（略）軒ちかき梅の匂ひを詩人の袖のかにまがひ、窓吹いる風に手枕匂ひ（略）

とある。また、同者の『浜のまさご』（元禄十年刊）の「梅」の項にも、

・梅は色よりも匂ひを賞玩するよし也

・梅に読合せたるは、月、雪、霜、鶯、霞など也

山は（略）・梅咲ぬれば山里にとひくる人をまつ

里は・里の垣ねの梅がかに道行人もたちどまる

宿は（略）・たがやどと知ぬかきねも梅がかにめでて尋ね入・軒ばの梅の咲ぬれば、まづ人の袖のかにあやまたる

などと梅の本意・本情がまとめられている。連歌辞書の『藻塩草』の「梅」の項をみると、

梅のはな香をかぐはしくかうばしき也、香を吹かくる春風、梅のはなこきが匂のこき也、やどの梅のうす紅のおそし枝

などが記されている。また、初期俳諧辞書の『俳諧類船集』（延宝四年刊）の付合をみると、

梅　梅花にほはざりせば誰かしるべきとよみしゆへとかや

とあり、「梅」に「庭の月」「春の夜の月」「賤が垣根」「春を知る山里」「軒端」などが付け合いとされている。また、「闇の夜」に「梅が香」、「園」に「梅」、「里」に「垣ほの梅」、「山里」に「梅暦」、

「宿」に「窓の梅」なども付け合いである。これらからみると、梅の花は里、園、軒端などに咲く。「山里」とともに類想される「山路」は、「菊」が付け合いであり、「梅」はなく、両者の付け合いが峻別されていることに留意しなければならない。

漢詩では、古注の『七部集大鏡』（月院社何丸著、文政六年刊）や露伴の『評釈炭俵』に、林和靖の梅花の詩が指摘されている。林和靖の梅花の詩は、『禅林句集』にもあり、広く知られていたものである。

衆芳揺-落ノ独リ喧-妍　占シ二盡シテ風-情ヲ一向フ二小-園ニ一

疎-影横-斜水清-浅　暗-香浮-動月黄-昏

因みにこの詩は、『円機活法』『事文類聚』などにも収録されている。これによると、詩の第二句目からは梅が園にあり、第四句目からは夜に香を放つものであることが知られる。

右に見てきた和歌、連歌、初期俳諧、漢詩などから、梅の本意・本情を、「梅が香」の句のに関連したものについてみると、梅の香は夜に匂い、時として月を詠み合わせる。従って、梅に朝日は詠み合せない。また、梅は、里・園・軒や垣に咲き、山路には咲かない。しかし、芭蕉は、これらの確立された詩情を敢えて用いず、山路の朝日に匂い立つと言い立てたのである。

ここで、山路と山里との相違についてふれておく。前に『俳諧類船集』の本稿に関連した記述をみたが、「山里」には「梅」、「山路」には「菊」が付け合いとなっており、山路の梅は、詩歌の類型からは捉えきれない。また、山里は、中国六朝の隠遁思想の影響を受け、俗世を遁れた人の営みが主題になるが、山路は、里と里とを結ぶ中継地であり、人の営みからは離れているものとして捉えられることがあり、両者は相違する部分を含んでいる。しかし、詩歌においては、明確に区別されているとは言えない用例もあるが、次に両者を

（四）

区別した山里の例歌を見ると、そこには人の営みが見える。

冬の歌とてよめる　源宗于朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬとおもへば

（古今和歌集・三一五）

題しらず　西行法師

さびしさにたへたる人の又もあれないほりならべむ冬の山里

（新古今和歌集・六二七）

このように、山里は、市中から離れた、山路を経て達する場所で、人の営みがある。一方、山路の例歌を見ると、人の営みは見えない。

中臣朝臣宅守与二狭野弟上娘子一贈答歌

あしひきの山路越えむとする君を心に持ちて安けくもなし

（万葉集・三七四五）

紅葉みにまかりてよみ侍りける　前大納言公任

うちむれて散るもみぢ葉を尋ぬれば山路よりこそ秋はゆきけれ

（新古今和歌集・五四六）

このように、山路は越えるべき山道であり、人の営みから離れた山中である。

右に見たように、芭蕉は、梅は里に咲いたものではなく、山の中に咲いたものだと言い立てたのである。山路に梅を詠んだ和歌の用例をみると、勅撰集には用例を見出だせないが、『夫木和歌抄』歌（七三七）にその用例を見ることができる。

百首歌　前中納言定家卿

風かをる遠の山ぢの梅のはな色にみするは谷のした水

この他に、『国歌大観』中には数例みられるが、それらの用例をして、山路に梅を詠むことを和歌の本意・本情として芭蕉が捉えたとは言い難い。山路に菊を詠むという類型からの刷新と捉えた方が適切である。しかし、芭蕉の「山路」は、場所の問題に留まらない。

三　山路

右に述べてきたように、「梅が香に」の句は、「のつと」と「梅が香」との解釈を抜きにしては成立しない。しかし、一句の主題は「山路」である。下五の「山路哉」に感動の中心が明示されていることは明白である。ところが、「山路」は歌語ではあるが、歌枕や季語ではなく、詩歌の伝統の系譜からみれば、感動の集約力は弱いと言えよう。そのためか、山路の主題としての解釈を明示した近・現代の注釈は少ない。芭蕉の「山路」は、単に場所を示しただけではなく、そこには特別な意識が働いていたものと推察される。以下に考察する。

先に、「梅が香に」の句の主題についての先行文献の言及をみておく。芭蕉の当代の解釈では、一句の主題は余寒であった。『三冊子』に、次のごとくある。

梅が香にのつと日の出る山路哉
　生ぐさし小なぎが上のはえの腸

此二句、或俳書に、「梅は余寒、はえのわたは残暑也。是を一体の趣意といはん」と門人のいへば、師、「尤」と答られ侍る也」。

「或俳書」とは、支考の『笈の日記』のことで次の記述がある。

梅が香の朝日は余寒なるべし。小なぎのはえのわたは残暑なるべし。是を一体の趣意と注し候はんと申たれば、阿叟もいとよしとは申されし也。

右の『三冊子』では「梅は余寒」、『笈の日記』では「梅が香の朝日は余寒」と言い、解釈の異同が認められる。『笈の日記』の記述は、一句の上五・中七から余寒を読み取ったものである。しかし、『三冊子』の表記からは、「梅」から余寒を読み取るのではなく、一句の主題が余寒であることの指摘であるとみられ、『三冊子』が一句のどこから余寒を読み取ったのかは明示されていない。

次に古注の解釈をみると、『俳諧古集之弁』（寛政四年刊、遅日庵杜哉著）に、

かの桧木笠着そらしつゝ、細脛に余寒の凍ふみしだきて、によひ出給ひけん

『七部集大鏡』（文政六年刊、月院社何丸著）に、

古注に余寒の題なるよし。句中に寒の字はなけれども、長夏にも寒かるべし。是等をや影略の法とやいふべき

『俳諧炭俵集注解』（明治三十年刊、棚橋碌翁著）に、

氷肌玉骨といふなる清絶の梅花が咲だちたるに、つやゝかなる朝日影さしわたしたるえもいはれぬ香に匂ひて、所は世塵をはなれたる山路なる哉とよき取合也。此句の主人公は、余寒にして日影の暖なるを愛る事、言外にあふれて妙趣いひ尽しがたし

などとあり、一句の解釈にそれぞれ余寒の重要性を認めている。『俳諧炭俵集注解』は、「余寒にして日影の暖なるを愛る」といい、一句の中に日の暖かと余寒の寒さとを対峙させている。『俳諧古集之弁』の「細脛に余寒の凍ふみしだきて」からは、山路を歩む時の余寒が感じ取られる。『七部集大鏡』は、一句の主題が余寒であることを指摘し、句中の語には表現されていないとする。

近代以降の注解では、「梅の香に」の「に」に切れ字の働きを認め、[注4] これを句の主題とするが、余寒とするものはない。ただし、余寒に言及したものとしては、岩波・新日本古典文学大系に「暁の冷気の中に」、小学館・日本古典文学全集に「余寒が頬に冷たく、あたりは清冷な気に満ちている」、岩波・日本古典文学大系（『芭蕉句集』中村俊定稿）に「山路はまだ余寒のきびしい早春の明方」などとあるが、早春の実景の反映としての余寒であり、一句の主題とはしない。これらの中では、岩波・日本古典文学大系に言及されている山路の

余寒が、注目される。

「梅の香に」の「に」に切れ字の働きが認められるという指摘は否定するものではないが、やはり切れ字「かな」の示す「山路」は特別に考慮すべきであろう。すなわち、芭蕉は、「山路」にも見るべき風雅の「余寒」があると、「山路」の詩境を世に問うたと考えるのである。

ところで、前章においてみた詩歌における山路は、人の営みのない山中であることに眼目があったが、次の歌にみられるように、冬でありながら春を思い遣る、また春でありながら冬を思い遣る山路の詩境が注目に値する。

屏風のゑに、仏名のあしたに、梅の木のもとに導師とあるじとかはらけとりてわかれをしみたるところ　よしのぶ

雪ふかき山ぢになににかへるらん春まつ花のかげにとまらで

（拾遺和歌集・冬・二五九）

仏名のあしたに、導師の帰るついでに、ほうしをとこども庭におりて梅をもちてあそぶ間に、雪のふりかかれる梅をれる　貫之

梅の花をりしまがへばあしひきの山ぢの雪のおもほゆるかな

（貫之集・一二六）

これらの山路の歌には、雪の山路の冬と、梅の花が咲く春とが同時に提示されている。このような冬と春との境を写し取る詩境から、芭蕉は春のなかでも最も早い時期を主題とする「余寒」に注目したのであろう。また、春の訪れは順次、麓から山へ向うが、麓では最も早く、山中では最も遅いので、山路の余寒は、最も遅い春の訪れを示すことになる。左に、余寒の歌をあげる。

宝治二年百首、余寒　常盤井入道太政大臣

春来ても猶寒渡る山里はこぞとやいはん峰のこがらし

（夫木和歌抄・五六二）

六百番歌合、余寒　前中納言定家卿

かすみあへず猶ふる雪に空とぢて春ものふかき埋み火のもと

（夫木和歌抄・五七六）

六百番歌合、余寒　前大納言兼宗卿

春来ても猶しみこほる山里は筧の水のおとづれもなし

（夫木和歌抄・五七七）

これらからは、余寒の本意・本情が、暦の上では春ではあるが未だ暖かさを知らない寒さを言うものとみられる。寒の戻りの、いったん暖かくなって再び寒くなるのとは異なる。冬から春に移行する季節の一時を捉えた詩境である。このような詩情は、詩人の心を殊更に強く刺激するものであろう。

ここで、芭蕉の山路の句をみておく。芭蕉における山路は、制作年次にしたがって深化していき、甚だ興味深い。まず、初期の作品を見る。

盃や山路の菊と是を干す　（延宝七年成立、『俳諧坂東太郎』所収）

この句は、『俳諧類船集』をみると「山路」に「菊」は付け合いとなっており、詩歌の伝統世界を踏まえたものであると解される。次は、句の発表当時から話題になったものである。

大津に出づる道、山路を越えて

山路来て何やらゆかし菫草　（貞享二年成立、『野ざらし紀行』所収）

『去来抄』の同句についての言及に、

湖春曰、「菫は山によまず。芭蕉翁、俳諧に巧なりと云へども、歌学なきの過也」。去来曰、

「山路に菫をよみたる証歌多し。湖春は地下の歌道者也。いかでかくは難じられけん、おぼつかなし。」[注5]

という。両者は、山路に菫を詠むためには証歌を必要とするという

（六）

ことに固執しているが、芭蕉は迅く証歌からの束縛を逃れ、山路に咲く菊ではない菫の美を発見していた。即ち、山路に菊ならぬ菫を詠み込んだところにこそ新しみがあったあったのである。この類型からの刷新は、後の軽みに通じるものであろう。

因みに、この句の「山路」に関して、深沢眞二氏は「貫之・能因の古歌の世界を受けつつ、いわば《志賀の山越え》を隠し題として成った句」[注6]とする。この解釈は、芭蕉が「山路」に対して特別な意識をもっていたことを示すもので、甚だ興味深い。

さて、本稿の「梅が香に」の句の山路は、右に述べた芭蕉の山路がさらに深化したものとして捉えられる。すなわち、芭蕉は「山路」に余寒の情を見出だし、新しい詩境として提示したのである。余寒は、立春以後の寒さを言うが、実感としは冬の延長であり、春の暖かさは未だ至らないうちのことである。「梅が香にのつと日の出る」と言い立てた春と、冬の延長のごとき「山路」の余寒とが鬩ぎ合いながら同時に存在する様子は、自然の季節の推移のそのままに切り取った景色であり、詩人の感性に響くものであった。このようにして山路には、季節の移る妙境が託された。

おわりに

以上の考察から、一句の解釈の視点は、次のように集約される。

平明な句調や俗語の使用は、軽みの一特徴であり、特に、「ぬつと」の類型を刷新して「のつと」という擬態語を発明・発見した。軽みの具現は、和歌等の伝統世界を打ち破ったところに実現するが、「梅が香」を闇夜ではなく夜明けにとらえ、梅に月ではなく朝日をあしらい、山路に菊ではなく梅を詠み合わせて新しみとした。また、上句の「に」に切れ字の役割をもたせて、梅の香の雅趣を、暖かさの感じられる春を象徴するものとして捉え、感動の一つの頂点となし、不易となした。そして、一句の主題を「山路」の余寒とした。すなわち、春の暖かさを感じさせる朝日に匂う梅と、春とは言え余寒の厳しい山路とを対峙させ、季節の推移する妙境を山路の余寒に集中させたのである。

なお、軽みの具現は和歌等の伝統世界を打ち破ったところに実現するということについては、芭蕉の椿や萩の花の句についても同様であり、すでに別稿に述べた。[注7]拙稿「芭蕉の椿の句」では、「うぐひすの笠おとしたる椿哉」の句について述べた。鶯の笠は、和歌の伝統を踏まえ、梅の花を言うのが本意・本情である。それを当時では流行の季題である椿の花とした。最新の季題であるがゆえに、鶯の不易と並行させた。また、拙稿「芭蕉と萩の句」では、「白露もこぼさぬ萩のうねり哉」の句について述べた。この句では、和歌の伝統をできるかぎり尊重しながら、ただ一点のみ、萩が露を「こぼさぬ」という擬人的な用法を採用することによって、俳諧の新しさを主張していた。椿の句は元禄三年二月の成立、萩の句は元禄六年七月の成立であり、元禄七年の「梅が香に」の句に先行する。椿、萩の句の和歌等の伝統世界を打ち破る姿勢は、梅の句に至ってより大胆に試み続けられていると言える。

「梅が香に」の句に戻れば、梅の香を闇夜ではなく夜明けに捉え、梅に月ではなく朝日をあしらい、山路に菊ではなく梅を詠み、さらに山路に余寒を捉えた詩境は、「流行」であり、新しみである。これを軽やかに表現することを目指した理念が軽みである。一方、「梅が香」は、詩歌の伝統を内包する「不易」である。これらの相反する理念が対峙し、昇華されて軽やかに表現し得た時、不易流行が具現されたと解釈される。本句はこれを成し得たものであるが、この一句に留まらず、『炭俵』に底流する理念でもあり、そのようにこそ読

み解かれなければならないであろう。また、伝統を内包する「不易」を視野に入れた「流行」の創造は、現代に繋がる芸術理念の萌芽として文学史に位置付けられる。「不易流行」は現在においても生彩を放つものである。

注1　今栄蔵著『芭蕉年譜大成』による。なお、本句は元禄七年六月二十八日刊『炭俵』の本文によるが、本稿中では表記を一部改めた。

注2　ぬっとはいりければ（昨日は今日の物語・下）
　　ぬっと出て立ちはだかり（国性爺後日合戦・二）
　　中からぬっと出る（信徳丸このて柏・上）

注3　露伴全集第二十三巻所収。昭和二十七年二月二十日刊。

注4　富山奏稿『助詞「に」と切字―芭蕉の発句「蓬莱に聞かばや伊勢の初便」の解釈をめぐって―』（「連歌俳諧研究」十七）、乾裕幸稿『芭蕉の「や」と「に」』（和泉書院刊「いずみ通信」28号）、白石悌三稿『炭俵』脚注（岩波・新日本古典文学大系『芭蕉七部集』）等。

注5　証歌は、「箱根山薄むらさきのつぼすみれ二しほ三しほ誰か染めけむ　大江匡房」（『堀川百首』）を指す。
　　支考の『葛の松原』に、
　　山路に菫とつゞけ申されしを、ある人、おぼつかなしと難じけるは、有房卿の「はこねやま薄むらさきのつぼすみれ」といへる歌を、不幸にして見ざりけむ人の心こそ、おぼつかなけれ。
　　とある。

注6　深沢眞二稿「大津にいづる道やまぢを越て」による。（『風雅と笑い―芭蕉叢考―』二〇〇四年九月、清文堂刊。）

注7　拙稿「芭蕉の椿の句」は、京都俳文学研究会会報「俳文学研究」三八号に所収。また、拙稿「芭蕉と萩の句」は、大阪俳文学研究会会報「会報」三六号に所収。

（八）